ほうこん
題字・清水英夫

GALAC・12月号・付録
2020年12月6日発行（毎月1回6日発行）
昭和43年3月8日第三種郵便物許可
〒160−0022
東京都新宿区新宿5−10−14　中村ビル2F
NPO法人放送批評懇談会
TEL（03）5379-5521／FAX（03）5379-5510
ホームページ　https://houkon.jp/
Eメール　kondankai@houkon.jp
編集・川喜田尚

放懇60周年記念事業検討

―10月理事会報告―

2020年10月29日、10月理事会をZoomミーティングにて開催した。

1．委員会活動報告

◇出版編集委員会　鈴木委員長

・9月28日にZoomにて委員会を開催した。12月号特集「リアリティショーとは何か」の詳細を決定。表紙は小栗旬さん、ザ・パーソンは小池修一郎さん。

・10月15日にリアルにて委員会を開催した。2021年1月号特集は「第58回ギャラクシー賞上期」。コロナ禍による応募数の減少が懸念されたが微減にとどまったため、連載「GALAXY CREATORS」を2本掲載することで対応する。表紙は爆笑問題、ザ・パーソンは西田亮介さん。

・2月号特集は「テレビドラマのこれから」（仮題）。2021年に向けてドラマ・エンターテインメントの持つ「力」を再認識できる企画を予定している。表紙は杉野遥亮さん、ザ・パーソンは調整中。

・2月号から渡邊悟・本誌副編集長による新連載「番組制作基礎講座」（仮題、3ページ）をスタートする。さらに境治さん連載「MEDIA EXPLOSION」を同年3月号にて終了し、4月号から藤田真文さんによる新連載（ドラマ作家論）をスタート予定。

◇選奨事業委員会

・第58回ギャラクシー賞上期応募作品本数が確定した（詳細は後述）。参加料の収支は過去5年の平均額で見ると微減にとどまった。上期選考結果発表は11月17日正午を予定している。

〈テレビ部門〉古川委員長

・9月30日にZoomにて月評会を開催した。月間賞には、火曜ドラマ「私の家政夫ナギサさん」（TBS）、金曜ドラマ「MIU404」（TBS）、土曜ナイトドラマ「妖怪シェアハウス」（テレビ朝日）、ETV特集「基地の街にロックは流れて～嘉手納とコザの戦後史～」（NHK）の4本を選んだ。

・58回上期の応募本数は146本で、昨年同期の10本減となった。

〈ラジオ部門〉五井委員長

・10月12日にZoomにて定例会を開催した。アナログ・レコードを音源とする番組をテーマに、「アナログコネクション」（ラジオ関西）、「アナログに恋してる」（大分放送）、「たまらなくAOR」（FM横浜）を聴取し議論を交わした。

・58回上期の応募本数は45本で、昨年同期と同数となった。

〈CM部門〉服部委員長

・9月23日にリアルにて定例会を開催し、23作品のCMを視聴した。無印良品「気持ちいいのはなぜだろう篇」、日産自動車「やっちゃえNISSAN」などが注目を浴

びた。

・10月16日にZoomにて定例会を開催し、31作品のCMを視聴した。JR東海「ひさびさ旅は新幹線！～旅は、ずらすと、面白い～」、パンテーン #PrideHair「この髪が私です。」などが注目を浴びた。

・58回上期には121本（テレビCM58本／ラジオCM63本）。昨年同期は166本（テレビCM110本／ラジオCM56本）で全体では45本減。テレビCMは52本減だが、ラジオCMは7本増加となった。コロナ禍がテレビCMに多大な影響を与えている。また今期初めてラジオCMの応募がテレビCMを上回った。

〈報道活動部門〉茅原委員長

・委員会報告は特になし。

・58回上期には10本の応募があり、昨年同期の3本増となった。

◇企画事業委員会　水島副委員長

・10月14日にZoomにて委員会を開催し、セミナー開催概要を左記のように決定した。

開催日：11月25日（水）18：00―20：00

タイトル：放送批評懇談会セミナー2020「科学の伝え方～コロナ時代に求められる、知識と思考法～」

講師：市川 衛（NHK制作局チーフ・ディレクター、メディカルジャーナリズム勉強会代表）

モデレーター：新美妙子（企画事業委員）

公募対象：正会員、維持会員ほか

運営体制、規模：Zoomを利用したウェビナー、参加費無料、先着順100名限定

◇広報委員会　滝野委員長

・「GALAC」2014年4月号（三浦春馬表紙）の記事をフェイスブックに公開し一カ月程度の掲載と予定していたが、好評のため掲載を無期限に延長した。

2．放懇60周年について

藤田真文60周年担当理事。放懇60周年の取り組みを理事会で共有した。（1）「ギャラクシー賞60年史」→電子化での刊行を目指す。広報委員会に委託。（2）「放送批評懇談会60年史」→「ギャラクシー賞60年史」の中にコーナーを設ける。（3）認定NPOを検討する。（4）ギャラクシー賞改革→若手メンバーを中心として「ギャラクシー賞検討プロジェクト」を立ち上げる。（5）その他→ギャラクシー賞60周年記念賞を検討する。

3．その他

①ザ・ベストテレビ、ザ・ベストラジオの件

・10月30日に「ザ・ベストラジオ2020」（NHK FM）が、11月13日に「ザ・ベストテレビ2020」（NHK）が放送され、第57回ギャラクシー賞受賞作品が放送予定。正会員にはメールでお知らせする。

【出席】音好宏、川喜田尚、藤田真文、出田幸彦、鈴木健司、古川柳子、五井千鶴子、服部千恵子、茅原良平、滝野俊一、市村元、奥律哉、国枝智樹、上滝徹也、小林毅、桜井聖子、鈴木嘉一、長井展光、桧山珠美、水島宏明、山田健太、中島好登

会議記録

［10月］……

12日　（選奨）ラジオ定例部会

14日　企画事業委員会

15日　出版編集委員会

16日　（選奨）CM定例部会

31日　（選奨）テレビ月評会

CM作りがやめられない理由

川野康之

大学を卒業して電通に入ってクリエーティブ局というところに配属されてから、ずっと広告を作ってきました。退職後はフリーになってクリエーティブの仕事を続けています。

これまでにやった主な仕事は、サントリーオールド、角瓶、大塚製薬ポカリスエット、小学館、旭化成ヘーベルハウス、JRA、ライオンなどなど。まだまだ続けます。これからです。

CMの企画を考えていると、必ず「もっとおもしろい企画はないか」と考え始めます。答えは簡単には出てきません。大げさに言えば今まで世の中にはなかった企画なのだから。でもそうやって出てきたアイデアは、たった15秒なのに世界の見え方を変えてくれることがあります。簡単ではないけど、その喜びがあるから僕はCM作りがやめられないのかもしれない。

そんな不思議な魅力を持つCMの話がもっとしたくて仲間入りさせていただきました。どうぞよろしくお願いいたします。

新入正会員自己紹介

批評は苦手ですが懇談は何とか…

木下一郎

家に帰ると真っ先に、家の灯りより先にテレビを点けていた、いや今も変わらずそうしてる。そして妻に呆れられているのが、ずーっとテレビを愛してきた（単純に大好きな）僕です。

ドラマ、バラエティ、歌、ドキュメンタリー……と何でも好きだった私は、残念ながらテレビの企画制作の仕事ではなく、それら番組の間に挟まれて何とか存在感をアピールし、経済活動の活性化に繋がるCMの企画制作の仕事に就き、今もそれを続けています。

そんな僕がありがたいことに歴史ある放送批評懇談会に入会させて頂きました。

放送批評懇談会……、批評は苦手ですが懇談は何とかなるかと……、この新人（歳はいってますが）どうぞよろしくお願いいたします。

そうだ！　ギャラクシー賞のCM部門の選考を担当させていただきます！

新入正会員自己紹介

CMの行方を求めて

中島和哉

現在クリエーティブディレクターとして日々広告制作に関わっており、最近はメディアの領域にとらわれず活動することが多いものの、CMプランナーとして社会人生活をスタートして以来、気づけば人生の半分近くをCMと共に過ごしてきたことになります。

その間にはACCの審査員やカンヌの審査員も務めさせていただいたり、最近は大学でも教鞭をとっていて、ゼミではカンヌの過去のCMを年度ごとに見せ、それに対する批評をさせていたりします。学生からあがってくるレポートに対し「分析が浅い！」などと言うこともあるのですが、いざ自分がこのCM定例会で批評する立場になると、じゃあそこまできちんと分析的かつ的確な考察を述べられるのか？という思いが頭によぎり始めております。

こんな私ですが、CMというものの存在価値と魅力を今の時代だからこそいま一度皆様と見つめる作業に関わりたいと考えます。今後ともよろしくお願いいたします。

「テレビの魅力」今昔

新美妙子

うっすら白くなったブラウン管テレビの画面をごしごしと手でこすって、親が帰る前に見ていた痕跡を消そうと躍起になった幼い頃の記憶がある。親にとって「なるべく見せたくない」悩ましい存在のテレビは、子どもにとっては疑いなく娯楽の王様だった。それがまさかスマホやゲームに興じるわが子に「テレビ見ないの？」と勧める時代が来るとは想像だにしなかった。

ではテレビは魅力を失ってしまったのかというと、そうではない。数は多くないが、好きなテレビを見るわが子は本当に楽しそうだし、放送がない時は心底がっかりする。テレビにはテレビにしかない魅力があることを確信する瞬間である。

ただSNSを手にした視聴者はテレビの舞台裏を知る「プロ」の視聴者である点が昔とは違う。私なりに今のテレビの魅力を伝えられたらと考え、僭越ながら放送批評懇談会の活動に参加させていただくことにしました。よろしくお願いいたします。

新入正会員自己紹介

「月光仮面」は見れなかった……

西畠泰三

ウチにテレビがやって来たのは、小学2年の夏でした。ドキドキワクワク胸いっぱいのお出迎え。しかし、ようやく見れる、と意気込んでいた「月光仮面」が寸前で番組終了し、「ジャガーの眼」に変わっていたのは大ショックでしたが。

将来の夢は？と聞かれて、「テレビ局の人！」なんぞと、邪気も無く答えていた幼い頃の想いそのままに、放送業界に身を置くという幸運を得て、四十余年を過ごすことが出来ましたが、その間、放送の可能性も限界も、素晴らしさも罪深さも、それなりに見聞きし、味わってきた積もりです。「ネットワーク」という厄介な怪物のようなども含め。

番組制作の折りに取材対象のほうから投げられた、「あんたたちが思ってる以上に、あんたたちの力は物凄く大きいんですよ……」という言葉は今も耳に残っています。

テレビが、放送が、大好きです。そしてその「大好き」がずっと続いていくことを、心から願っています。

新入正会員自己紹介

屋根に登ってアンテナ調整

樋口喜昭

米沢に住んでいた中学生の頃、アマチュア無線のアンテナを調整するため、よく屋根の上に登っていました。ある頃から、テレビのアンテナもいじるようになり、うまく調整すると普段見られない隣県のテレビが見られることに気が付きました。もっときれいな映像で見たいと、高性能なアンテナと増幅器を使って、ようやく人の姿がはっきり見えるほどになりました。初めて見る他県のテレビは、知らない世界を写す窓のように感じました。学校では、私が他県の番組を見ていることが噂になり、友人や先生まで自宅のアンテナを調整してほしいとの要望が続出。学校が終わると屋根の上を渡り歩いてアンテナ調整をする日々となりました。作業に没頭しているうちに日が暮れていたあの頃を今でも思い出します。

現在、放送のローカリティをテーマに研究をしておりますが、知らない世界の番組を見ることに一喜一憂した思い出が原動力になっているのかもしれません。